

## フランスを旅する子どもたち (一)

——王政復古期の「周遊もの」から

G・ブリュノ 『二人の子供のフランス一周』まで——

杉 本 圭 子

十九世紀のフランスでは作家やジャーナリストによる国内の旅の記録やルポルターージュと並び、子供や青年を主人公とする「周遊もの」が多く書かれた。少年たちがフランス国内をめぐりながらさまざまな出会いと経験を重ね、成長を遂げていくという筋書きの物語や読み物は、子供向けの絵本や挿絵入り雑誌の出版が盛んになった十九世紀前半以降のフランスで、広く受け入れられた。とりわけ成功を収めたのは、小学校中級の教材としてその後数十年にわたって使われることになった、G・ブリュノ（フィエ夫人の筆名）(G. Bruno / Madame Fouillee, 1833-1923) 作『二人の子供のフランス一周』(*Le Tour de la France par deux enfants*, 1877)である。革命後のフランス各地の地理、歴史、産業、自然、先人の偉業を、普仏戦争によって故郷ロレーヌを追われた二人の孤児のアイデンティティ探しの物語とからめて紹介したこの作品についてはすでに多くの研究がなされており、またこれ以前にも似た趣向の教育的な作品群が存在し、二十世紀半ばにかけて三〇近い追随作品を生んだことが知られている<sup>1</sup>。ほぼ同時期に出版された児

フランスを旅する子どもたち (一)

フランスを旅する子どもたち (一)

童文学の傑作、エクトール・マロ (Hector Malot, 1830-1907) の小説『家なき子』(Sans famille, 1878) においてこれに類する作品のひとつとされる。

本研究では十九世紀フランスの表象に関する研究の一環として、『二人の子供のフランス一周』および『家なき子』を一連の「周遊もの」の到達点と見なす立場から、個々の具体的な作品の分析を通して、その系譜と変遷をたどってみたい。手始めとして本論文では、この分野に関するパトリック・カバネルの浩瀚な研究の中で扱われている作品群を起点として、近代ツーリズム勃興前夜の人々の移動や旅のありようが、こうした書物の中でどう描きこまれているか、そしてフランス革命以降の国民意識の高まりと自国へのまなざしの変容が、基本的に教育的な性格をもつ「周遊もの」のエクリチュールにどのような影響を与えたのかを、同時代の旅行ガイドブックやフランス案内書なども参照しながら検証していく。

## 「旅の世紀」

十九世紀は「旅の世紀」である。国境を越える旅もそれ以前とは異なって商人や宣教師などの専売特許ではなくなり、シャトーブリヤン、ラマルティース、ゴータイエ、ネルヴァル、フロベールなど、未知の風物や新たな詩的靈感の源を求めて、ヨーロッパの外部へ、オリエント(コンスタンティノーブル、エルサレム、エジプト)や北アフリカ(アルジェリア、チュニジア)へと旅立った作家は多い。<sup>2)</sup> 近隣のロンドン、イタリアは言うまでもなく、ライン河畔、ベルギー、スイス、スペインもまた、ロマン主義時代の旅行記や演劇作品に豊かな素材を提供した。

いっぽう、スタンダールが一八三八年出版の架空のフランス旅行記『ある旅行者の手記』(Mémoires d'un touriste, 1838)の冒頭で、「フランス旅行記はほとんど存在しない」と書いているように<sup>(3)</sup>、フランス革命期までは、考古学者や地質学者、建築家、聖職者、官吏、軍人など、特殊な目的をもった職業人以外の文人が、純粹な観光や保養を目的に、フランス各地を旅して回ることはそう多くはなかった<sup>(4)</sup>。地方(Province)はずっと、いくつかの都市を除けば、文化の中心から遠く離れた周縁であり、地方人といえ、モリエールのコメディ・バレエ『プルスニヤック氏』(Monsieur de Pourcauque, 1669)に登場するリモージュのブルジョワ、プルスニヤック氏のように愚鈍で不作法な人物が典型とされていた。地方は風刺の対象ではあっても「詩(ポエジー)」とは無縁とされ、つねに皮肉をもって軽くあしらわれるのが常だった。地方が文学上のテーマとなり、小説の中で具体的な描写をもって書き分けられるようになるのは、バルザックの研究者ニコル・モゼによれば王政復古期の終わりごろ、一八三〇年ごろのことである<sup>(5)</sup>。まずは風俗喜劇や写実的な小説の分野で、地方の町に降り立ったバリジャンの目を通していなか町の景観や風俗が描かれることから始まり<sup>(6)</sup>、当初は架空の地名や頭文字(イニシャル)、あるいは\*(アステリスク)によって表されていた都市の名が、しだいに具体的な地名に置き換えられていく<sup>(7)</sup>。フランスを舞台とする歴史小説や、旅日記の体裁をとったエティエンヌ・ド・ジュイ(Etienne de Jouy, 1764-1846)のルポルタージュ、「地方の隠者」シリーズ(L'Hermite en province, ou observations sur les mœurs et les usages français au commencement du XIX<sup>e</sup> siècle, 1817-1827, 14 vols)<sup>(8)</sup>などを経て、七月王政期のバルザックの小説ではトゥール、イスターダン、サンセール、アランソン、アングレームなど、実際の地方都市が舞台として描かれるようになる。異国趣味(exotisme)や地方色(à couleur locale)の流行がひと段落したとき、小説家たちはフランスの地方に新たな素材を見出した。とりわけバル

フランスを旅する子どもたち (一)

## フランスを旅する子どもたち（一）

ザックにとつてのトゥーレーヌ地方、サンドにとつてのベリー地方は彼らの故郷であり、作品の中で特別な位置を占めることになるだろう。

小説の場合、まずは作品の主題や筋の展開を考慮して舞台を定めるだろうし、実際の旅行記の場合には、史跡監察官としてフランス各地を根気強くまわったメリメのように特別な使命を帯びているのでなければ、わざわざフランスを一周するルートを選ぶことはないだろう。しかも王政復古期はまだ馬車と船の時代であり、気の遠くなるような時間をかけて、徒歩、馬、乗合馬車、川舟、蒸気船など、さまざまな交通手段を乗り継いで移動する必要があった。周遊ものの作者が、教育的な意図からできるだけ多くの地域や都市に触れようと思えば、いきおい、ルートは人工的になり、ストーリー性のある作品なら、こじつけにならないような筋書き上の工夫も必要になる。ここではルートと物語の運びに着目し、この時期のフランス周遊ものをいくつかの型に分類してみよう。

### 王政復古期のフランス周遊もの——類型化の試み

G・ブリュノ作『二人の子供のフランス一周』のルートに典型的に表れているように（図版1<sup>①</sup>）、この時期の周遊ものはパリからフランスの東部にかけての地域を起点とし、時計回りに回るものが多い<sup>②</sup>。この物語は両親を亡くしたアンドレ（十四歳）とジュリヤン（七歳）の幼い兄弟が、普仏戦争でプロイセンの占領下に置かれたトゥーレーヌ地方から、消息のつかめない父の弟を探し出して後見人になってもらうために南仏に向かい、再会を果たしたあと、その叔父の破産というアクシデントを乗り越えて故郷に戻り、フランス国籍を回復するまでの一年足らずの出来事を、二百

枚を越す図版や地図を添えて描いている。兄弟は徒歩でヴォージュ山脈、ジュラ山脈に沿って南下し、アルプス山脈を仰ぎ見ながら馬車でロース川沿いのマコンまで出て、内陸のブルゴーニュ地方とオーヴェルニュ地方に立ち寄ったあと、一部列車を使いながらロース川沿いの諸都市（リヨン、ヴァランス、アヴィニヨン、マルセイユ）をたずねる。叔父のフランスがマルセイユにいないことがわかったので、二人は海路と運河でポルドーに至り、ようやく叔父に再会する。その後一行は船で大西洋、英仏海峡をまわってダンケルクに到着、運河を使ってピカルディ地方、シャンパーニュ地方経由で故郷のロレーヌ地方に戻り、めでたく旅の目的を果たすが、財産回復の手続きの必要が生じたので列車でパリに向かい、ついでに立ち寄ったオルレアネ地方の知り合いの農場を手伝うことに

フランスを旅する子どもたち (一)



図版1 ブリュノ『二人の子供のフランス一周』の行程

フランスを旅する子どもたち (一)

なつて、そのまま定住を決める<sup>13)</sup>。マルセイユ以降は海路を選んだため、兄弟が足を踏み入れている南仏のラングドック地方、コルシカ島、南西部のピレネー、アキテーヌ地方、西部のポワトゥ・シャラント地方、ブルターニュ、ノルマンディー地方、そしてとりわけ中央部のロワール川沿いについてはごく簡潔な記述になっている。

いっぽう、この作品の先駆と目されるフレッセル夫人 (comtesse de Flesselles, 17. 1828) の『フランスを旅する若者たち』 (*Les jeunes voyageurs en France*, 1822) では、いまは六人の子の父親になっているトゥレーヌ地方在住の男性が若い頃、滞在先のリヨンで父親を亡くし、四才下の弟を連れて時計回りにフランス全土をまわり (図版2)、商人としての修業をつむさまが



図版2 フレッセル夫人『フランスを旅する若者たち』の行程 (リヨン→パリ)

描かれている<sup>14</sup>。途中、サンテティエンヌ近郊で聖職者の手に一時託される弟のヴィクトール（十歳）は別として、主人公のオーギュスト（十四歳）はコルシカ島を含めたフランス全県を踏破したことになっている<sup>15</sup>。リヨンからボルドーまでは徒歩、それ以降は乗合馬車を使った足かけ八年間の旅の間に、二人は成人し、兄は伴侶を見つける。作品中、物語の進行上重要な拠点となる都市がいくつか設定され（リヨン、サンテティエンヌ、ボルドー、ルーアン、パリ）、それ以外の都市については町の外観、歴史、産業、名所旧跡、自然の景観、住民の気質や土地の風俗など、一般的な記述に終始している。

## グランド・ツアー

それに対し、同様に「青少年に捧げる」(*Ouvrage dédié à la jeunesse*) という副題を付されたジュール・マルレ (Jules Marle, ?-1850 頃) の『アルフレッド、または若き旅行者』(*Alfred ou le jeune voyageur*, 1835) では、進路は反時計回りになっている<sup>16</sup>。裕福な独身貴族ドルヴィルは、自分が後見人になっている腹違いの弟のアルフレッド（十六歳）の教育のために、義母の反対を押し切ってフランス一周の旅に出る。二人は従者と馬車をともなつてパリを出発し、ノルマンディー地方、ブルターニュ地方から大西洋岸をまわり、ピレネー山脈の一部を馬で越え、南仏から北上して中央山塊方面に大きく迂回しながら、東部をまわってパリに戻る。結果として、コルシカ島を含む三つの県を除くすべての地域に言及がなされているが、フレッセル夫人の著作と同様、経路はかなり入り組んだ人工的なものとなる。各都市の記述の内容はフレッセル夫人のものと似通っているが、非人称的な叙述がひたすら続く前者に比

べ、マルレの作品では時折、好奇心旺盛なアルフレッドと義兄の間に対話が繰り返し広げられ、単調さが回避されている。またピレネー越えの場面では馬車を降りて馬に乗り、パリ近郊では町をよく見て回るために徒歩を選ぶなど、状況に応じて登場人物たちの交通手段にも変化がつけられ、リアリティが増している。

年代的にはやや遅めだが、マルレの物語の設定と展開は、十七世紀末から十八世紀後半にかけて、主にイギリスの上流階級の子弟たちが自己修養の一環として行った「グラランド・ツアー」の慣習を思い起こさせる。グラランド・ツアーの行き先は主にイタリアとフランスで、十代後半の青年たちに家庭教師役の大人が付き添い、数ヶ月から数年の間をかけて目的地を馬車でめぐり、大陸の文化や自然、芸術、遺跡、社交界に直接触れ、青年貴族としてのたしなみや教養を身につけるのである。フランス人によるフランス周遊旅行という特異な設定ではあるが、マルレの物語の主人公のアルフレッドは十六才、まさに独り立ちを目前にした年齢にあり、また将来義兄のドルヴィルの財産を受け継ぐことになるその立場を考へても、ガロ・ロマン時代から今に至るフランスの歴史の痕跡をたどり、自然条件や地理的条件が住民の暮らしぶりや地場産業に及ぼす影響を眺め、社会の成り立ちや矛盾について考へてみるという体験は貴重なものになるだろう。しかも彼のそばには墓碑銘の読み方から鉱物の名称まで、森羅万象に通じ、自らの後継者となる義弟が「他人の目を通してではなく、自らの理性によって人や物を判断できるように」<sup>18</sup>と心をくだく、愛情深い兄がいる。熱烈な愛国者であるらしきこの兄は、ヨーロッパを知るにはまずフランスから、フランスを知るには生まれた土地であるパリからということ<sup>19</sup>で、まずはセーヌ川上流の散策に弟を誘う。そしてヴェルサイユまで来たとき、ドルヴィルは弟に自分の目で見ただけのことについて考へるように促す。アルフレッドは疑問を投げかける。パリ近郊で目にした城館や庭園は、おそらく裕福な人たちの所有になるものだろうが、こうしたものを持たない庶民はどう



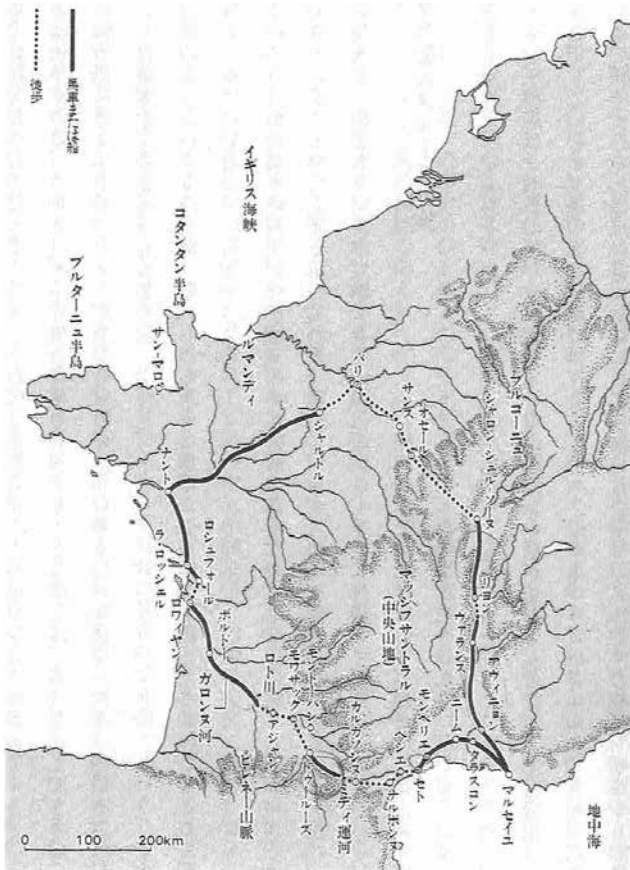
生活しているのか、農業以外の働き口といっても、ここには工場だつてろくにないではないかと。ドルヴィルは弟に、金満家のパリジャンの田園生活への憧れが、郊外の住人たちから貴重な土地と収入源を奪っている実態を話して聞かせる。<sup>20</sup>これ以降、社会の不平等と土地の有効活用といった問題について、アルフレッドはより深く考えることになるだろう。旅の教育的効果というものが、典型的に示されている一節である。

## 遍歴職人の旅

ところでJ・P・バイヤールによれば、南を經由して東から西へ時計回りに回るというルートは、フランスの伝統的なコンパニオナージュ（遍歴職人の旅）の行程であるという。<sup>21</sup>コンパニオナージュとは、十八世紀から十九世紀前半にかけて盛んにおこなわれた、印刷工や指物職人、ガラス職人など、職人組合に属する職人たちが、職人宿のある町から町へと移動しながら行く先々の親方の工房に入り、一定期間修業を積み、腕をみがくという制度である。<sup>22</sup>期間は長い場合には数年に及び、旅先で親方資格を得て独立する者もあった。その中にアグリコル・ペルディギエ (*Agricole Perdiguer, 1805-1875*) という指物職人がいる。職人組合の実態を初めて文字化した著書『職人組合の書』 (*Livre du Compagnonage, 1839*) によって知られる活動家で、このころピエール・ルルーの社会主義思想に傾倒していたジョルジュ・サンドが支援し、彼女自身も触発されて指物職人を主人公とする『フランス遍歴の職人たち』 (*Le Compagnon du Tour de France, 1840*) を書いた。このペルディギエが若い時分に四年半にわたって行ったフランス遍歴の旅について、喜安朗が詳しく紹介しているのを見ると、十八世紀までに整えられた主要街道に沿って、出身地

フランスを旅する子どもたち (一)

のアヴィニオンからソーヌ・ローヌ川、ガロンヌ川、ロワール川に沿って時計回りに、県都やそれに基づる都市を巡っているのがわかる(図版3)。旅の基本は徒歩で、各都市にある組合の職人宿が旅の安全を確保し、職の世話もしてくれる。ただしペルディギエは図版でもわかるように、大型乗合馬車(デシリジャンス)や船(川、運河、海)も頻繁に利用し、旅の効率化をはかる一方、ラングドック地方の一部では風景を楽しむためにわざと街道



図版3 指物職人ペルディギエの行程

から逸れ、浜辺を探索するというモダンな感性ものぞかせている。<sup>24</sup> こうした旅の大きな特徴は、職人組合の勢力の強いフランスの南半分（ロワール地方、ポワトゥ・シャラント地方、アキテーヌ地方、ミディ・ピレネー地方、ラングドック・ルシヨン地方、プロヴァンス地方、ローヌ・アルプ地方）が中心になっていることである。リュック・ブノワによれば、遍歴の旅はリヨンを出発点にすることが多く、リヨン、マルセイユ、ボルドー、ナント、オルレアンの五つの宿駅は欠かせない。<sup>25</sup> フランス北部や北東部がルートから除かれているのは、それらの土地ではむしろフランドル地方やドイツを起源とするギルド制度の影響が強かったためではないかといわれる。<sup>26</sup> 『二人の子供のフランス一周』のコースは、その意味ではやや北に偏ったロレーヌ地方（ファルスプール）から始められ、フランシユ・コンテ地方に向かつて南下する形をとっており、この区間は兄のアンドレが錠前職人としての修業をしている部分に相当する。<sup>27</sup> ただし二人は職人宿を転々とするわけではなく、つてを頼って土地の職人夫妻の家や農家に泊めてもらったり、安い旅籠に泊まったりしているので、厳密に言えば遍歴職人の旅をしているわけではない。しかもボルドーからダンケルクまでは海路を選んだために、ロワール地方がルートから抜けている。最終的に、アンドレは叔父と弟とともに身を落ち着けたオルレアネ地方の農場近くの町で、農場を手伝いつつ錠前職人として働くことになるが、増補版で付け加えられた「エピソード」には、農場主のギヨームの娘たちとそれぞれ結婚したアンドレ（四十七歳）とジュリアン（四〇歳）が、農場の拡大のためにともに汗を流す姿が描かれており、職人としてのアンドレのアイデンティティは失われてしまったようにも見える。

ともあれ、物語冒頭で喪服を着た二人の兄弟が「旅行用の小さな包みをしっかり結わえ、棒で肩にかついで」<sup>28</sup> 歩いていく姿は（図版4）、「杖の先に包をつけて肩にかつぐという旅する巡歴職人のスタイル」<sup>29</sup> によく似ている。産業革

フランスを旅する子どもたち (一)

命の進展により、フランスの工業は家内工業的な手工業から近代的な重工業へと重点を移しつつあった。近代的な製法により作られた鉄に熟練の手を加えて製品に仕立てる錠前職人は、蹄鉄工や刃物職人などとともに、いわば古いフランスと近代化されたフランスとをつなぐ存在であり、こうした若者が物識りの年長者（行商人ジェルタル氏）に連れられ、ヨーロッパ随一と目されたニヴェルネ地方のル・クルーズ（Le Creusot）の巨大な溶鉱炉を目を輝かせて眺めるさまは、その意味で象徴的である。<sup>11)</sup>

### 行商人の旅

アンドレの職業教育がしばしば中断を余儀なくされるのは、彼らのフランス周遊の第一の目的が行方不明の叔父を探し出すことだったから



LE CHIEN DE MONTAGNE. — Ce chien est d'une taille très-haute; il a la tête grosse et la mâchoire armée de crocs énormes. Les poils de sa robe sont longs et soyeux. Dans la montagne, il garde les troupeaux et au besoin les défend contre les loups ou les ours. Les plus beaux chiens de montagne sont ceux du mont Saint-Bernard, dans les Alpes, ceux des Pyrénées et ceux de l'Auvergne.

図版 4 ブリュノ『二人の子供のフランス一周』第二章挿絵

であり、さらに叔父に再会してからは、二十年分の貯蓄を失ってしまった気の毒な叔父のために、できるだけお金を使わず、故郷フアルスブルに戻る方法を見つける必要があったからだ。プザンソンからヴァランスまで行商の手伝いをしてきたのも、そういった理由による。ところで、コンパニオナーージュほど組織化されてはいなかったが、行商 (colportage) の世界もまたアンシャン・レジーム以前の時代から、パリや地方の都市を相互に結ぶ独自のネットワークを持っていた。扱う商品は本・版画類と、それ以外の商品に大別される。行商人は各地の本屋や物資の産地で品物を仕入れ、顧客リストをもとに、大きな荷を背負って全国をわたり歩いた。<sup>(32)</sup> 本の道徳的、宗教的な内容に対する取り締まりはルイ十四世の治世以降、厳しくなる一方だったので、本の行商人は本以外の商品もあわせて扱い、小間物商も土地の名産品など、付加価値が高く需要の多い品物を専門的に取り扱うようになった。ドーフィネ地方では眼鏡や種子や花、オーヴェルニュ地方ではワイン、といった具合である。<sup>(34)</sup> ジェルタル氏がアンドレとジュリヤンから預かったお金で購入したのはチーズ、パスタ、鶏肉などの食品や、レースや編み靴下などの小間物、刃物や時計などの実用品が中心で、<sup>(35)</sup> それらをジュラ山脈のジェクス (Gex)、マコン (Macon)、リヨンといった近隣の市で売りさばく。<sup>(36)</sup> ジェルタル氏はふたりに行商の手ほどきをし、商売のこつも教える。たとえば、ワインの取引の多いジェクスの市で、ぶどうの収穫で農家が忙しい時期に、隣の県で仕入れた質のよいブレッヌス鶏を大量に持ちこめば、大きな収益を上げることができるのである。二人は氏の教えを忠実に守り、客の値切り交渉を断固拒否して大きな利益を得る。しかもある顧客の婦人に商品を届けた際におつりを一フラン余計にもらいすぎたことに気づいたジュリヤンは、疲れた足を引きずって婦人のもとに引き返し、そのご褒美に、フランス各地の偉人について書かれた本を受け取る。<sup>(37)</sup> この本はのちのちジュリヤンにとって、貴重な独学の教材となるとともに、読者にとっても、二人が足を踏み入れなかった

フランスを旅する子どもたち (一)

地域についての情報源となるわけだから、この行商人修業の効用はあらゆる意味で大きい。

ジェルタル氏はジュラ地方の出身で、ブルゴーニュ地方、オーヴェルニュ地方、ローヌ川中流域を活動範囲におさめており、移動距離からすると中規模の行商人と言えるだろう。当時のフランス周遊ものの中には、ほかにも行商をテーマとする作品がある。たとえばM・A・E・ド・サント (M.A.E. de Saintes (Alexis Eymery の筆名), 1774-1854) の『ジャンとジュリヤン、または小さな行商人たち』 (*Jean et Julien ou les Petits colporteurs, 1831*) は、ピレネー地方の小さな町モルラア (Morlas) の十三歳と十一歳の孤児の兄弟が、人々の善意に助けられながら行商人として成長し、その過程で失踪していた父親を捜し当てるという、典型的な教養小説である。兄のジャンは父親が失踪したあと、いったん弟を置いてある研ぎ職人とともにガスコーニュ地方一帯をまわり、商売のしきたりと読み書きを身につける。その後故郷に戻り、弟と連れだつて行商の旅に出る。

アキテーヌ盆地のモントバン (Montauban) からアジャン (Agen) に向かっていたとき、二人は森の中で森番の男に出会い、ひと晩の宿を提供してもらう (図版5)。その縁で、森番が仕える領主の館に連れて行かれた二人は、翌日のパーティーの景品として手持ちの品をすべて買い上げてもらうことになるが、折しも屋敷で火事が発生し、ジャンは命の危険も顧みず、領主夫妻の三人の子供たちを炎の中から救い出す。夫妻は兄弟に深く感謝し、しばらく屋敷に住ませたあと、上等な衣類と新品の幌つき馬車、そして燃えてしまった商品のかわりに三千数百フラン相当の品物をプレゼントする。アジャンの市でこれらの品を売りさばき、大きな利益を得た二人は、その後三年間にわたってボルドー、ギブレー (Guibray)、ボーケール (Beaucaire) といった名高い大市を渡り歩く。その間、フランスの布地を扱うピエールという名の中年の行商人と知り合い、この教養と信仰を兼ね備えた人物を父のごとく慕う

よようになる。ボーケールの市で大事な売り物のリボンと売上金の入った箱を盗まれたり、船でアヴェイニヨンまで遡ろうとして転覆事故にあったり、さまざまなアクシデントに見舞われながらも、三人はリヨン、モントロワ (Montreuil) を経てパリに到着。一週間観光を楽しんだあと、ノルマンディー地方、ロワール地方、シャラント地方を経て故郷のモルリアに戻る。すると今まで二人をずっと見守ってきたピエールが、かつて失踪した父親であることが判明し、家族の絆を取り戻した三人は自宅を買い戻して店を開き、一家で幸せに暮らす、というのが大まかな筋である。

フランスを旅する子どもたち (一)



図版5 サント『ジャンとジュリヤン』扉挿絵

兄弟のうち、弟の名がジュリヤンであること、兄が火事の際に子供を救い出すこと、暗い森の中を兄弟がさまよう冒頭の場面など、この物語には後年の『二人の子供のフランス一周』との共通点が多く見られることを、カバネルが指摘している<sup>11</sup>。さらに森の利用価値、瓦作りの工程や商業都市モンローの歴史など、ところどころに教育的な解説の章が挿入されていたり、船の転覆事故で助け出されたり、結果として「父探し」の物語となっているところも、フイエ夫人（ブリュノ）との類縁性を感じさせる。兄弟は年に一度、または場所によっては毎月開かれる大市（foire: 年市、定期市とも訳される）をまわり、手芸材料、リボン、金物、刃物などを売る。火事で焼けた商品のかわりに彼らが領主夫妻から受け取った品の中には「イギリスの鍔、ドイツの小刀、ヴェネツィアの小型の鏡「…」バラの花飾り、縁飾り<sup>12</sup>」などが含まれていた。証明書を持った業者は市の会場に場所を割り当てられ、期間中、近くの宿屋に寝泊まりしながら、シーツと竿を組み立てた簡易屋台で商売をすることができ<sup>13</sup>る。そして商売を終えたあとは売上金の一部を銀行に預け、新たに近隣で商品を仕入れ、売りさばく、その繰り返しである。リヨンのように、週市（marché）と大市とが両方行われる都市もあったが、原則として大市は年に一度の開催なので、ここを根拠に活動する商人の生活はいわば季節移動の様相を呈することになる<sup>14</sup>。馬車に荷を積みこんで大市から大市へと移動するジャンとジュリヤンの活動範囲はフランスの広域に及ぶが、『二人の子供のフランス一周』のアンドレとジュリヤンの行商のパターンに近いのは、むしろ冒頭で挙げたフレッセル夫人の『フランスを旅する若者たち』のほうかもしれない。リヨンで父親の急死に見舞われたオーギュストとヴィクトールは、その遺産を元手に、近隣の土地で当座しのぎの買いつけと販売を繰り返す。リヨンで絹の靴下とネクタイを購入し、コルシカ島でさんごを買い付けてマルセイユで加工用に売り、ボーケールの大市で絹製品を売ったお金で香辛料を買い込み、ル・ピュイ（Le Puy）ではレースを購入する<sup>15</sup>。



徒歩での行商で、しかも弟はまだ十歳ということもあり、重いもの、かさのあるものは運べないという制限のもと、商才に恵まれたオーギュストは、父親の遺した資産を倍にまで増やすことに成功する。ただ、ボーケールの市で不覚にも中東やアフリカ起源のきらびやかな品々に目をくらまされ、ずっしりと重い香辛料を買いきんでしまったことで、援助を申し出たイポリートという少年の助けを借りることになるのだが、この少年がたいへんな食わせ者であったことがのちに判明する。<sup>(48)</sup>

ちなみにオーギュストはその後、恩人の世話してくれたボルドーの商社に雇われ、その出張販売員 (commis-voyageur) として働くことになる。<sup>(49)</sup> 以後は馬車を用い、資金と信用状を手には、フランス各地の取引先 (correspondant) を順次回るといってセールスマン生活を送ることになるだろう。このオーギュストの転身は、行商の形態そのものが急激に衰退し、かわりに出張販売員という職業に取って代わられる、世紀半ば以降の流れを先取りしているようで興味深い。<sup>(50)</sup> かつての自営行商人は今や特定の商社の専属社員となり、会社の決めたルートに従って取引先をまわり、商談をまとめる。オーギュストはそうした取引先のひとつ、ルーアンの卸売り業者の娘と結婚し、雇用主の会社の経営をまかされて裕福な事業主となる。

ブリュノの『二人の子供のフランス一周』の執筆年は一八七七年。フレッセル夫人の著作 (一八二二) や『ジャンとジュリヤン、または小さな行商人たち』 (一八三二) よりも半世紀近く後である。執筆時期の隔たりにもかかわらず、これらの作品に描かれた職人と行商人の旅の様相にはあまり差がないように思える。もちろん、『二人の子供のフランス一周』のほうには普仏戦争敗北の余波が色濃く刻まれており、また兄弟が道中鉄道を利用するなど、国民生活の近代化が着実に進んでいることもうかがわれる。ただ、勤勉、実直、相互扶助のモラルを旨とするブリュノの物

フランスを旅する子どもたち (一)

語が、主にひと昔前のレトロなフランスを念頭において書かれており、遍歴職人の旅も行商の文化も衰退の一途をたどっていた世紀後半には、ある種のノスタルジーを感じさせるものになっていたことは確かであろう。

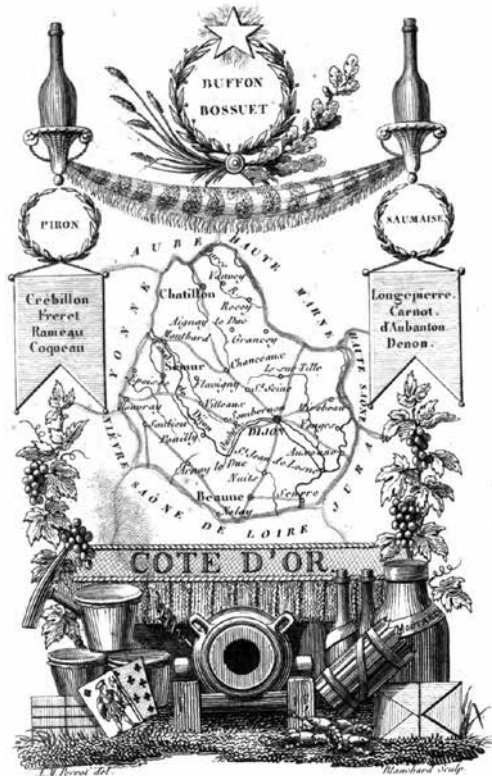
### 「ピトレスクな旅」とガイドブック

これまで見たように、主人公たちがフランスのほぼ全県を踏破するフレッセル夫人の『フランスを旅する若者たち』やマルレ『アルフレッド、または若き旅行者』のようなタイプの作品では、いきおい物語内容と各地についての記述の関連が薄くなる。ページを追うにつれ、旅はフランス各地の歴史、景観、建造物、産業など、基本的な情報を提供するための言い訳のような印象を与えるようになり、マルレの作品のように、知的好奇心にあふれた青年を聞き手に設定する場合でも、語りの平板さは免れがたい。世紀半ばになると、後に触れるタストゥ夫人 (Madame de Tastu, 1798-1885) の『フランス旅行』(Voyage en France, 1846) や、レヴィイ・アルヴァレス、ウジエース・ミニエール (Ernest Lévi-Alvarès et Eugène Manuel) 共著の『フランス、全学校向けの一般読本』(La France. Livre de lecture courante pour toutes les écoles, 1854-1857) のように、教材用に特化した読本が出てくるが、それ以前にも過渡的な作品はあった。

フレッセル夫人の著作と同年の一八二一年に出たコンスタン・タイヤール (Constant Tillyard, 1791-?) ほか一名著の『若き旅行者たち、または散文と韻文によるフランスについての手紙』(Les jeunes voyageurs ou Lettres sur la France en prose et en vers, 1821) は、章の構成が県ごとになっており、全六巻ですべての県を網羅するという、今

まで見てきた物語要素の強い周遊ものよりもいっそうシステムティックなつくりになっている<sup>②</sup>。章の冒頭には主人公の青年が描いたとされる、その県の地図と名産品、有名な建造物や出身の著名人の名前を組み合わせた装飾的な挿画 (vignette) が掲げられている。たとえば第二巻の「コート・ドール県」の章の扉絵では、県の地図を中心に、ピュフォン、ボシユエ、ヴィヴァン・ドノン、クレピヨン・フィスといった著名人の名を記したフラッグや月桂冠が周りを囲み、名産品のワインとマスタードにちなんだぶどうの木

フランスを旅する子どもたち (一)



図版 6 コンスタン・タイヤールほか『若き旅行者たち、または散文と韻文によるフランスについての手紙』第四巻「ブルゴーニュ」の章の扉絵

とワインの瓶、マスタートードの壺の絵などが配されている(図版6)。内容的には、兵役を終えてパリに戻ってきた二十四歳の青年アルフォンスが、父親から従妹のロールをいなづけとして与えられるが、まだ結婚年齢には早いのでしばらく旅に出て見聞を積むように言われ、このいささか強権的な父親の指示にしたがってすぐさま馬車に乗り込み、フランス四十八県をまわるといふものである<sup>32)</sup>。ロールに手紙を書くことだけは許されていたので、アルフォンスはソナム県(県都アミアン)を皮切りに、行く先々の県の人口、著名人、地名の由来、土地の風俗、産業、歴史、名所旧跡などをロールに書き綴る。賢明なロールはその手紙を熟読し、未来の夫を鼓舞するのみならず、第二巻以降では息子がなかなか帰ってこないことに業を煮やしたアルフォンスの父親に同行し、ノルマンディー、ブルターニュ、ロワール地方一帯をまわって、アルフォンスの全県制覇を助ける。アルフォンスの修養のための旅行という意味では、カバネルが称するように「グラランド・ツアーの伝統の国内版<sup>33)</sup>」と言えるであろうし、書簡体の形式は十八世紀によく見られた「…からの手紙」というスタイルを思い起こさせる<sup>34)</sup>。さらに散文ベースの記述に文学作品からの引用や自らの所感を記した韻文を交えるスタイルは、十七世紀のシャペルとバシヨームンの旅行記にまでさかのぼる。

そうした前の時代の要素を多く引き継ぎながらも、C・タイヤールの著作は時代に即した、教育的な書物であることを強調している。表紙に引き続いて記された「趣意書」(Prospectus)には、本書が「数理・自然地理学の学習を容易にする」ために書かれたこと、その大きな目的は「フランスの各県を農産物と工業製品、商業、芸術、名所、自然の驚異、風俗習慣、歴史、文学の観点から知らしめること<sup>35)</sup>」とあり、今日までに出た無味乾燥で散漫な書物とは異なり、若い読者にも学びの喜びを与えうる書である、と記されている。実際、この文学好きの青年が細かな故事や逸話まで拾い集め、地方に残る因習や後進性を嘆きつつ、洞窟や火山の奇観など、その土地の見どころを選んで伝える

生真面目さは感心すべきもので、最後にその労が報われ、故郷で婚約者と結ばれる結末もむべなるかなである。各章の内容は比較的均質で、県ごとの章構成になっているためにルートは人工的で、各章間の連関も薄い。最終刊（六巻）の巻末には目次を兼ねた「フランスの面積および人口統計表」(Tableau statistique de la superficie et de la population de la France) が見開き五ページにわたって付されており、各県の面積、人口、主な都市、県都とその人口、パリからの距離を一覧表で見ることができ。概して百科全書的な記述に近づいていると言えようが、実はこの記述スタイルは、C・タイヤールの著作と同時代に多く出ていたフランス各地の名所を体系的に紹介する書物や、草創期のガイドブックの形式に非常に似通っている。たとえば、「ピトレスクな旅」(«voyage pittoresque») と称される、ロマン主義時代に特有なジャンルがある。<sup>(47)</sup> 一八三五年のアカデミーの辞書には「風景、絵、版画入りの旅の記録」とある。その代表例がシャルル・ノディエ、ティラー男爵、アルフォンス・ド・カイユー共著『古きフランスのピトレスクでロマンティックな旅』(Voyages pittoresques et romantiques dans l'ancienne France, 1820-1878) という大型本で、当時の著名な挿絵画家たちの手になるリトグラフイー(石版画)に作家や知識人の文章を添えて、フランス各地の廃墟化した古代遺跡やゴシック教会、修道院、自然の景観(滝、峡谷)などを情趣豊かに描き出したシリーズである。<sup>(48)</sup> こうしたシリーズに類する著作としては、ヴィクトル・ユゴーの兄アベル・ユゴーの手がけた『ピトレスクなフランス』(France pittoresque, 1835)のように、名所案内と統計集の性格をあわせもつ百科全書的な書物もあった。<sup>(49)</sup> すなわちアベル・ユゴーの書物では、民俗衣装をまとった人物やその地方出身の著名人、町の景観や名所旧跡を描いた図版や地図に混じって、各県につき二十を超える項目がもうけられ、地勢、歴史、古代遺跡、風俗・気質、言語、出身の著名人、気候、動植物相、主要都市、人口、財政収支、産業(農業、商業…)等のそれぞれについて

フランスを旅する子どもたち (一)

て、細かな記述がなされている。その副題に「フランスの県および植民地の絵画的、地勢的、統計的記述」(*Description pittoresque, topographique et statistique des départements et colonies de la France*)とあるように、もし「統計(的)」(*statistique*)という形容詞がこの時代、アンヌ＝マリ・ティエスの言うように、「現代のような数学的な意味をもたず、国家の富と力を形成する様々な事物についての体系的な調査報告という観念をあらわ」<sup>(46)</sup>していたとすれば、文学者や知識人によって書かれたこの種の本は、フランス各地の最良の部分を知らしめるとともに、その現状を網羅的に語りつくすことを目指していると言えるだろう。

そしてそこに旅行者のための、目的地までの経路や所要時間、宿駅、宿屋についての情報を加えれば、十九世紀前半のフランスで流通していたガイドブックの内容に近いものになる。たとえば、同じく「ピトレスク」の語をタイトルに含む『旅行者のためのピトレスクな旅行案内書』<sup>(47)</sup>を見ると、地図や銅版画に加え、「統計的概観」(*aperçu statistique*)という小見出しのもとに、該当県の地勢、気候、植生、土地の気質、産業などの情報が集められ、地区ごとの主な町の紹介(名所旧跡、沿革、出身者…)がそれに続く(図版7)。今日、フランスの書店にならぶ国内のガイドブックの中にも、ミシュランの「ギッド・ヴェール」(*Guide Vert*)のシリーズのように教養主義的色彩を残しているものがないわけではないが(城であればその沿革や建築上の見どころを、こと細かに解説している)、たいの旅行ガイドはもっと実用的な情報を重視する。たとえば第二帝政期以降、鉄道の普及とともに発展した「ギッド・ジョアンヌ」(*Guides-Joanne*)シリーズなど、『旅行者のためのピトレスクな旅行案内書』よりも後の世代に属するフランス国内向けガイドブックにおいては、百科全書的な傾向は徐々に薄まっていく。すなわち、依然として地理や歴史に関する記述の割合は多いものの、運賃や列車内の設備、列車・馬車の乗り継ぎやホテル、レストランの住



フランスを旅する子どもたち (一)

富を体系的に把握しようとする共和国政府の思惑<sup>(65)</sup>、そしてイギリスやイタリアに対抗して自国の自然や文化遺産を顕揚しようとする愛国主義的な風潮があった。実際、この時代の「ピトレスクな」版画集、統計集、ガイドブックのいずれを見ても、フランスの景観の変化にとんだ美や文化的な豊かさをたたえる言説があふれているのに気づく。たとえば、のちにアシエット社に版權を買い上げられ、「ギッド・ジョアンヌ」の一翼を担うことになる「ギッド・リシャール」(Guides-Richard) シリーズの著者は、前書きで次のように述べている。

なんと恩知らずなのであろうか、われわれは自分たちの美しい国を、ヨーロッパ中の羨望の的になっているフランスを、あまりに軽んじている。「…」フランス人は外国を旅する前に、自国を知るべきではないだろうか。「…」真に愛国心のあるフランス人なら自国にたなびく煙を見て満足し、風俗、習慣、言語もまったく異なる国民のもとへ気晴らしを求めに行ったり、散財したりはしないだろう。「…」わが国の凱旋門も浴場も、泉も、円形競技場も墓地も、イタリアより数は少ないであろうが、旅行者の注意を引くに十分値するのである。<sup>(66)</sup>

ガイドブックの言説の目的が「教育し、魅惑する」(« instruire et séduire ») ことにあるなら、青少年に自国について学ばせ、その魅力を理解させようとする「周遊もの」において、同様の愛国主義的な論調があらわれることは十分に予測できる。この項の初めに触れたように、世紀半ばの第二帝政期に出たいくつかの作品は教育的意図を前面に出し、物語としての体裁は形式的なものにとどまっているものが多く、そのひとつにタストゥ夫人の『フランス旅行』がある。<sup>(68)</sup> ここでも夏休みの休暇を利用して実家に戻った長男のギョームが、中学校で優良賞をとったごほうびに



「スイスの風光明媚な山々や、イタリアの古代遺跡の廢墟や、イギリスのゴシック建築や優れた産業を見たい」と父親に切り出すが、財務省の役人である父親は仕事のためフランスを離れることができず、そういったものはフランスでも見られるし、国内にあるすぐれた資源を見ないうちに外国に行くのは恥ずべきことだ、だから旅行するとしたらまずはフランスだろうな、と答える<sup>(19)</sup>。従順な息子は不満に思う様子もなく、ぜひとも国内で港を訪ねたり、船に乗ったり、古い教会を調べたり、炭坑や工場がどんなものかを知りたいと応じ、姉のアンリエットもそれに同調する。こうしてデュモンテル家の子供たちは六週間の休暇の間、夜ごと庭でテーブルを囲み、父親が若いころ、国内を視察して回ったときにとったメモやスケッチ、そして道路の地図を眺めつつ、各地の建造物、産業、植生、言語や風俗について、父親から教わることになる。典型的な「居ながらにしてする旅」(« voyage immobile »)の形式を採っており、語り手である父親はときに子供のひとりに呼びかけ、その子の興味を引きそうな話題を差し向けるといった工夫はするものの<sup>(20)</sup>、語りは概して中立的で単調であり、このタイプの本が一八五〇年から六〇年代にかけて一大ベストセラーとなり、やがてブリュノの『二人の子供のフランス一周』に取って代わられるまで版を重ねた<sup>(21)</sup>とは、にわかには信じがたいほどである。全体としては今まで見た「周遊もの」と同様の百科全書的な内容で、そこに遺跡の発掘や運河の建設など、近年起きた変化についての情報が加わっている<sup>(22)</sup>。

各章の構成に注目すると、第一章が「ブルゴーニュ地方經由、パリからリヨンへ」、第四章が「リヨンからマルセイユへ」、第五章が「トゥーロンからブリアンソンへ」というように、先に挙げた草創期のガイドブックの構成と非常に似通っていることに気づく。タストゥ夫人は章の冒頭に目的地への距離の入った行程表を掲げており(図版8)、その体裁は明らかに当時のガイドブックの体裁を模している(図版7と比較)。話者と聞き手がともにパリの自宅に

とどまったまま、語りの内容だけが当時の主要な馬車の路線（一部には鉄道も通っている）に沿って展開するのである。この場合、経路はパリから地方へと伸びる放射状のルート、あるいは地方の大きな都市間を結ぶ横のルートとなり、各章の内容の間に有機的なつながりはない。また、第一章「ブルゴーニュ地方経由、パリからリヨンへ」に続き、第二章のタイトルが「ブルボネ地方経由、パリからリヨンへ」、第三章が「シャンパーニュ地方経由、パリからリヨンへ」となっているように、パリから地方の都市に向か

## TROISIÈME VOYAGE.

### DE PARIS A LYON, ROUTE DE LA CHAMPAGNE.

—————

De Paris à Provins.....	86 kil.	De Châtillon à Dijon.....	85 kil.
De Provins à Nogent-sur-Seine.	18	De Dijon à Beaune.....	38
De Nogent à Troyes.....	56	De Beaune à Châlon.....	33
De Troyes à Bar-sur-Seine.....	53	De Châlon à Mâcon.....	38
De Bar-sur-Seine à Châtillon.....	34	De Mâcon à Lyon.....	67
En tout.....		506 kilomètres.	

—————

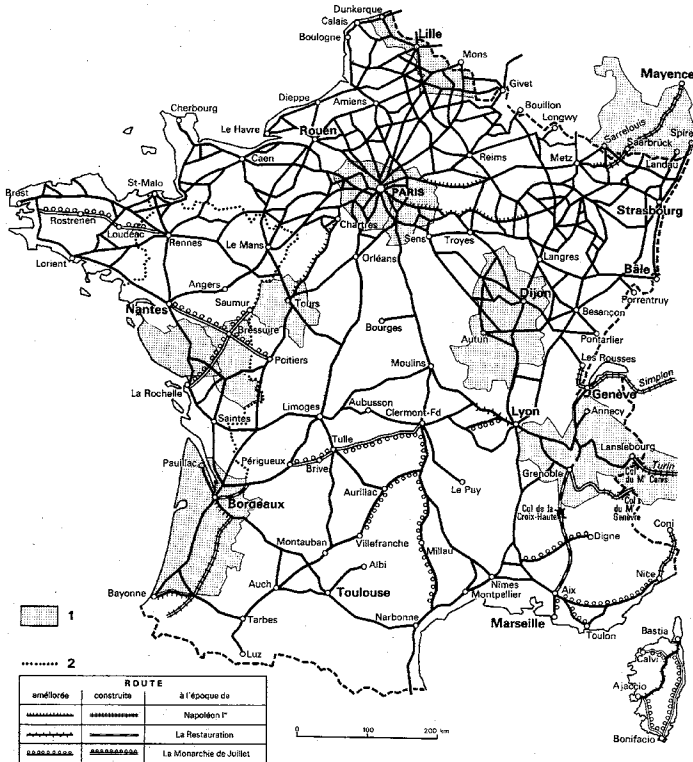


ous sortirons de Paris en gagnant le pont de Charenton que vous connaissez déjà, et, laissant sur notre droite l'école vétérinaire d'Alfort, nous longerons la rive gauche de la Marne. Nous irons jusqu'à neuf lieues sans que rien attire notre attention, si ce n'est le château de Gros-Bois, dont les jardins et la galerie renferment des trésors en sculpture et en peinture. Gros-Bois appartient avant la révolution de 89 au comte de Provence, qui régna plus tard sous le nom de Louis XVIII. La Convention en fit une propriété nationale. Après le 18 brumaire, Bonaparte, premier consul, le donna au directeur Barras. Il a ensuite appartenu au général Moreau, puis à Berthier, prince de Neuchâtel.

La petite ville de Bric-Comte-Robert, dont le château ne présente plus que des ruines, fut une place de guerre

うルートは何通りか示すやり方も、ガイドブックの方式と似通っている。パリからマルセイユ（南仏）、ポルドー（アキテーヌ地方）、バイヨンヌ（ピレネー地方）、ブレスト（ブルターニュ地方）、シエルブール（ノルマンディー地方）、ダンケルク（ベルギー国境）、ストラスブール（アルザス地方）、そしてブザンソン（フランシュ・コンテ地方）へ。ルートの重複も欠落も恐れないデュモンテル氏の語りは、中央集権国家フランスの相貌をくつきりと描き出す（参考までに、十九世紀半ばごろの道路網を掲げておこう…図版9）。デュモンテル氏が訪ねた土地の思い出を語ることはないわけではない

フランスを旅する子どもたち（一）



図版9 フランスの道路網（1780年から1850年）

フランスを旅する子どもたち (一)

が、概して語り手と土地との関わりは薄く、物語としての体裁はあくまで外枠（語りの形式のレベル）にとどまっていると言ってもよいだろう。教科書としての情報提供の役割が優先され、今まで見てきた「周遊もの」に多かれ少なかれ見られたような、主人公の成長物語という性格はほとんどなくなっている。しかも巻末には「補遺」(Appendice)として「総合統計」(Statistique générale)が付され、人口の分布、農牧業、地方の行政・裁判・徴税・大学・軍隊の諸制度、鉄道などについて解説がなされている。「周遊もの」はいったん物語と手を切り、どこから読んでも同じように読める電話帳のような媒体に近づいているという印象を受ける。

## 成長の物語

『二人の子供のフランス一周』の作者G・ブリュノ（フイエ夫人）は、「真の市民教育の礎」は子供たちが「祖国を知ること」にあると考え、とかく抽象的な概念になりがちな「祖国」を彼らに生き生きと、目に見えるものとして伝えるために、「子供たちが「一般に」旅行記に寄せる興味を利用した」のだという。<sup>23</sup> 普仏戦争敗北直後の特殊な状況が、こうした祖国愛への執着に結びついていることはまちがいない。好奇心旺盛なアンドレとジュリアンは、行く先々で庇護者のな大人に導かれながら、その土地の歴史、産業、自然、風俗習慣、出身の著名人、動植物、科学などについて学び、生きる知恵を身につける。ただし先にも見たように、二人のたどる経路には欠落が多く、内容的にも農牧業、伝統的な手工業への傾倒が目立ち、本全体が必ずしも網羅的な記述を志向しているとはいえない。だが作者はこうした知識提供の部分と、二人の孤児の旅を通じての成長物語が不協和音を生じないよう、さまざまな工夫をし

ている。文体を子供向けに易しくし、本文の内容を二百枚をこえる教育的な図版で補おうとしたのもそのためであるし、歴史や偉人の伝記についてはしばしば、ジュリヤンがジェットクスである婦人から贈られた伝記の本への参照という形をとっている。勤勉なジュリヤンは、あるときはオーヴェルニュで出会った同い年の孤児の少年の労働の合間に、ガリアの英雄ヴェルサンジェットリックスやオーヴェルニュ地方出身の偉人（ミシエル・ド・オピタルとドゥセ將軍）の生涯を語り聞かせ<sup>24</sup>、あるときは船の上で対岸のブルターニュ半島を眺めながら、猛将デュ・ゲ克蘭の一生について、叔父のフランツに読んで聞かせる<sup>25</sup>。便宜的な方法ではあるが、こうした所作を通じて知識が空疎なままに終わることなくジュリヤンの内部に取りこまれ、知的な糧となっている印象を受けるのである。

このように『二人の子供のフランス一周』は、先行する時代のさまざまな旅のかたち（グランド・ツアー、遍歴職人の旅、行商人の旅）や、フランスをめぐるさまざまな言説（「ピトレスクな旅」、ガイドブック）から多くの要素を取りこみながら、「フランス周遊もの」のひとつの到達点としての姿を見せる。地理・歴史・道徳の教材としての用途に加えて、子供たちを飽きさせない物語性を強く保っていたところが、出版直後の十年間で三百万分を売り上げたという成功の鍵であったのだろう<sup>26</sup>。そして出版の翌年、今度はエクトール・マロの『家なき子』の主人公レミが同じく孤児として、アンドレやジュリヤンに劣らぬ劇的で過酷な彷徨を経験することになるのだ。

#### 【図版出典一覧】

図版1 G. Bruno, *Le Tour de la France par deux enfants*, Belin, 1994, p. 318.

図版2 以下の地図をもとに著者が作成

フランスを旅する子どもたち (一)

フランスを旅する子どもたち (1)

- Paul-M. Bouju, Georges Dupoux et al., *Atlas historique de la France contemporaine 1800-1965*, Armand Colin, «Collection U», 1966, p.15.
- 図版 3 喜安朗『近代の深層を旅する』平凡社、1996、p. 97.
- 図版 4 G. Bruno, *Le Tour de la France par deux enfants*, Belin, 1994, p. 7.
- 図版 5 M.A.E. de Saintes, *Jean et Julien ou les Petits colporteurs*, Eymery, 1834 (扉挿絵)
- 図版 6 L.N.A.\*\* et C.T. \*\*\* (Constant Taillard), *Les jeunes voyageurs ou Lettres sur la France en prose et en vers*, Lelong, 1821, t. 2, p. 16.
- 図版 7 Girault de Saint-Fargeau, *Guide pittoresque du voyageur en France*, Firmin Didot, 1834-1838, t.1, p. 25.
- 図版 8 Madame de Tastu, *Voyage en France*, Tours, A.Mame, 1846, p. 66.
- 図版 9 Paul-M. Bouju, Georges Dupoux et al., *Atlas historique de la France contemporaine 1800-1965*, Armand Colin, «Collection U», 1966, p. 70.

注

- (1) Patrick Cabannel, *Le tour de la nation par des enfants. Romans scolaires et espaces nationaux (XIX<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècles)*, Belin, 2007. 著者の研究対象はフランスにとびまらずイタリア、スペイン、ドイツ、スウェーデン、中南米にまで及んでいる。一八一八年から一九四〇年にいたるまでの各国周遊ものとの派生形を、国民概念の形成という観点から調べ上げた、比較文化、比較教育学の名著である。
- (2) 邦語文献として石川美子『旅のエクリチュール』(白水社、二〇〇〇)、『および石井洋二郎『異郷の誘惑——旅するフランス作家たち——』(東京大学出版会、二〇〇九)を挙げておく。
- (3) Stendhal, *Les Mémoires d'un touriste dans Voyages en France*, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1992, p. 3. ただし、十七世紀に遡ればシャルル・バシヨールの名高い韻文まじりの旅行記 (*Voyage de Châpelle et Bachannont*, 1663) もあり、この物言いには誇張があると編者のデル・リットは指摘する (Introduction par Victor Del Litto, *Ibid.*, p. XIII-XIX)。

- (4) 革命以前のフランス旅行記については、フランス旅行記のアンソロジー Goulemot, Lidisky, Masseau, *Le Voyage en France : anthologie des voyageurs européens en France, du Moyen Âge à la fin de l'Empire*, Robert Laffont, « Bouquins », t. 1, 1995 年の主なものを読め。
- (5) Nicole Mozart, *La ville de province dans l'œuvre de Balzac*, Genève, Slatkine Reprints, 1998 (初版 1982), p. 29.
- (6) たとえばモゼも名を挙げているピカル (Picard, 1769-1838) の四幕喜劇『小さな町』(*La petite ville*, 1801) では、パリからやってきた主人公たちが地元に住人たちにあらぬ噂をたてられ、ほうほうの体で退散する。ちなみにこの作品は、モゼが「地方を描いた最初の小説家」と呼ぶスタンタールの『赤と黒』(*Le Rouge et le Noir*, 1830) の着想に「役買った」とみなされている。
- (7) たとえば過渡期にあたる『赤と黒』では、架空の地名ヴェリエール (Verrières) と実在の地名ブザンソン (Besançon) が並立している。頭文字・アステリクス表示は、特定の町が名指されているととらえられないようにするための配慮だが、当時は地名だけでなく登場人物の人名にも同様のシステムが用いられていた。
- (8) 『ショセ・ダンタンの隠者』(*L'Hermite de la Chaussée-d'Antin*, 5 vols, 1812-1814) を皮切りとする「隠者」シリーズの一人などについてルポルタージュするというもの。ジュイは各地にいる通信員から情報を得ていたとされる。
- (9) フランスにおける異国趣味<sup>エキゾチスム</sup>は基本的には中東や南洋など、ヨーロッパの外部の風物によって醸し出される情趣を貴ぶ傾向を指すが、地理的な適用範囲については論者によって異なり、イギリス、スペイン、イタリアなど、近隣諸国について使われる場合もある。「地方色」は特定の時代や地域<sup>エトワ</sup>の生活様式や衣装、慣習、言葉遣いなどに特徴的に表れる風情を指す。やはりロマン主義時代にもはやされた概念で、ウォルター・スコットの歴史小説(中世および近世のスコットランド)、ユゴーの演劇(スペイン)などに色濃く表れている。
- (10) この分野でのメリメの貢献は大きく、各地の古代遺跡や教会をまわってその状態を調べ、南仏(一八三五)、西部(一八三六)、オーヴェルニュ(一八三八)、コルシカ(一八四〇)について詳細な学術報告書を残している。
- (11) G. Bruno (pseudonyme de Augustine Fouillée), *Le Tour de la France par deux enfants*, Belin, 1994. 出版以来、何度も改訂が施された。とりわけ重要な改訂は一九〇六年の増補改訂版で、末尾に新たなエピソードが付け加えられたほか、フランスを旅する子どもたち(一)

フランスを旅する子どもたち (一)

一九〇五年の政教分離法を受けて宗教色を大幅に排除している。本論文ではこのベラン社の普及版に加え、必要に応じて初版(一八七七)の翌年に出た第八版(初版と同一内容)を参照した。

(12) Patrick Cabannel *op.cit.*, p.109.

(13) オルレアネは革命前の旧州の呼び名で、ロワール川中流域のオルレアンを中心とした地域。一九〇六年に出た増補改訂版では二〇ページ弱のエピソード(Épisode)が付け加えられ、三人が農場に定住してから約二十七年後、一九〇四年の時点での農場の様子が描かれる。かつてアンドレたちが世話になった行商人のジェルタルが、パストゥール研究所関連の施設で働く息子のヴィクトールを伴って農場を訪れ、ジュリヤンの息子のジャンを相手に、二十世紀の新しい科学技術のすばらしさを語る。

(14) Mme de Flesselles, *Les jeunes voyageurs en France: histoire amusante, destinée à l'instruction de la jeunesse, contenant ce que la France présente de plus curieux*, P. Blanchard, 1822, 4 vols. 副題は「フランスでもっとも興味をそそる事物をもちこんだ、青少年向けの教育的で愉快な物語」ほどの意味。一八二九年以降、一八六二年まで再版を繰り返し、青少年向けの教育読本として人気を博した(Cabannel *op.cit.*, p.109)。一八四一年に、地理学者マルト・ブランが全体にわたって削除と加筆を行った改訂版が出ている。本論文ではもっぱらフレッセル夫人の版を参照した。

(15) 大まかにルートを示せば、ロヌヌ・アルプ地方(リヨン、サンテティエンヌ)↓プロヴァンス・アルプ・コート・ダジュール地方↓ラングドック・ルシヨン地方↓ミディ・ピレネー地方↓オーヴェルニュ地方↓アキテーヌ地方(ポルドー)↓ポワトゥ・シャラント地方↓リムーザン地方↓サントル地方↓ブルターニュ地方↓ノルマンディー地方(ルーアン)↓ピカルディ地方↓ノール・パ・ド・カレ地方↓ピカルディ地方↓シャンパーニュ・アルデンヌ地方↓アルザス・ロレーヌ地方↓フランシュ・コンテ地方↓ブルゴーニュ地方↓イル・ド・フランス地方(パリ)。

(16) Jules Marès, *Alfred ou le jeune voyageur*, Didier, 1835.

(17) グランド・ツァーについては多くの文献がある。まとまった記述としては工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説——植民地、共和国、オリエンタリズム』、東京大学出版会、二〇〇三、一七六—一七九頁。ほかに基本文献として本城靖久『グランド・ツァー 英国貴族の放蕩修学旅行』中公文庫、一九九四、および岡田温司『グランド・ツァー 十八世紀イタリアへの旅』、岩波新書、二〇一〇がある。



- (18) Jules Mariès, *op. cit.*, « Introduction », p. 3. (1)でドルヴィルは、自己啓発という非常に古典的な旅の効用を説いている。しかしアルフレッドの母は「自分で経験しなくても他人の旅の記録を読めば十分だ」と息子の旅立ちに反対する(四五頁)。
- (19) *Ibid.*, p. 14.
- (20) *Ibid.*, p. 78-81.
- (21) Jean-Pierre Bayard, *Le Compagnonnage en France*, Payot, 1977, p. 177-179. Jacques et Mona Ozouf, « *Le Tour de la France par deux enfants, le petit livre rouge de la République* », in *Les Lieux de mémoire*, tome 1, « Quarto Gallimard », 1997, p. 279-280.
- (22) 遍歴職人の起源と歴史については上記のバイヤールの研究書のほか、日本語で読める文献としては、リュック・ブノワ『フランス巡歴の職人たち』(加藤節子訳、白水社、文庫クセジュ、一九七九)および喜安朗『近代の深層を旅する』(平凡社、一九九六)が詳しい。遍歴職人組合の最古の記録は十五世紀に遡る。秋山哲一・小幡谷友二著『甦るフランス遍歴職人』によれば、最盛期の十九世紀後半には四十の職種をカバーし、二十万人近くの加入者がいたが、各派閥の激化や産業革命の進展による労働の機械化により次第に数を減らし、第一次世界大戦後の一九二〇年にはほぼすべての支部が閉鎖された。しかし粘り強い改革の結果、第二次世界大戦中の一九四一年以降、新たな組織として生まれ変わり、バン職人、靴職人、樽職人ほか、多くの現代的な職種も受け入れている(秋山哲一・小幡谷友二著『甦るフランス遍歴職人』、出版館ブック・クラブ、二〇一〇、第二章「遍歴職人組合とは——「渡り鳥たち」の復活まで」)。
- (23) 喜安朗、同書、七五—九八頁。ただしつねに時計の針の向きとはかぎらない。十八世紀後半に旅をしたガラス職人ジャック・ルイ・メネトラはパリから南仏の諸都市へ、逆向きに回っている(四三—四五頁)。
- (24) 喜安朗、同書、八〇—八一頁、九四—九六頁。
- (25) リュック・ブノワ、前掲書、八五頁。
- (26) 喜安朗、前掲書、七五—七六頁。
- (27) G. Bruno, *op. cit.*, p. 13 (ファルスプールの親方のもとで一年半働いたという証明書の文面), p. 43 (エビナル在住の、親方のいとこの工房で一か月間働く)。プザンソンからヴァランスまでは行商人ジュエタルの商売を手伝い、マルセイユ、セト、フランスを旅する子どもたち (一)

フランスを旅する子どもたち (一)

ボルドーと三隻の船を乗り継ぐ間は、日銭を稼ぐために船上での仕事に精を出しているので、錠前職人としての修業はエビナルで途絶えている。

(28) *Ibid.*, p. 299.

(29) *Ibid.*, p. 5.

(30) 喜安朗、前掲書、八一頁。

(31) G. Bruno, *op. cit.*, p. 108-116. 間に包まれたル・クルーズの町を遠目に眺めていたアンドレは町が赤く染まっているのを見て、火事だと勘違いする。あれは巨大な製鉄所だとジェルタル氏に教わると、「ぼくたち錠前職人の加工する鉄がどうやって作られるのか、ぜひ見てみたい」と氏にたのみこむ (p. 109)。翌日、三人はさっそく溶鉱炉、鑄造の現場、鍛冶場を見学する。

(32) 行商全般については以下の綿密な研究がある。Laurence Fontaine, *Histoire du colportage en Europe* (XV<sup>e</sup>-XIX<sup>e</sup> siècle), Albin Michel, 1993.

(33) 十九世紀当時の本の行商の状況については、『十九世紀ラルース』の項目に詳しい(※ colportage ※の項目)。本の行商の最盛期は十九世紀半ばで、七月王政下ではパリ、ルーアン、リモージュなどで安価に仕入れた本を、三五〇〇人も行商人が全国津々浦々に、またしばしば国境を越えて、スイスやスペインなどの近隣諸国にまで届け、識字率の向上に貢献したと言われる。ただ、システムの衰退もまたこの時期に始まり、書籍や版画を扱う行商人はすべて所轄の警察署あるいは知事の許可証を得なければならぬという一八四九年七月の禁令が、すでに鉄道網の発達や廉価本の普及によって地元の本屋との競合を強いられていた行商人の活動を決定的に阻害した。

(34) Laurence Fontaine, *op. cit.*, p. 186.

(35) ジュラ地方のグリユイエール・チーズ (G. Bruno, *op. cit.*, p. 79)、ラ・フレスの鶏 (p. 94)、リムーニュ盆地の Pasta、小麦粉、ドライフルーツ (p. 126)、クレルモン・フェランのレース (p. 127)、ティエールの刃物 (p. 129)、オーヴェルニュ地方のチーズ (p. 130)。氏がリヨンの市で売ったものの中には、ほかにジュラ地方の靴下、プザンソンの鎖・宝飾つき時計、フランシユ・コンテ地方のイヤリング、ジュラ地方の木彫りのナプキンリング、たばこ入れ、くしなどが含まれていた (p. 149)。

- (36) *Ibid.*, p. 84, p. 101, p. 149.
- (37) *Ibid.*, p. 101-102.
- (38) *Ibid.*, p. 73.
- (39) 以下の版を参照した。M.A.E. de Saintes (pseudonyme d'Alexis Eymery), *Jean et Julien ou les Petits colporteurs*, Eymery, 1834 (第二版)。
- (40) キブレーはノルマンディー地方カルヴァドス県にある都市。毎年八月に大市が開かれ、とくに馬の取り引きで有名だった。ボーケールはプロヴァンス地方ロース川の河口付近に位置する都市で、中世以降、毎年七月に大市が開かれ、近隣のイタリヤやスペインのみならずフランドル、オランダ、ドイツ、イギリス、中東からも商人を集めて大いに賑わった。
- (41) Patrick Cabannel, *op. cit.*, p. 163.
- (42) M.A.E. de Saintes, *op. cit.*, Chapitres 4, 5 et 22.
- (43) *Ibid.*, Chapitre 19. 『二人の子供の…』では大西洋岸を進む蒸気船が英仏海峡で難破し、操舵手のギヨームが小舟を操って兄弟と叔父のフランチを救う。『ジャンとジュリヤン』では船はロース川をさかのぼる小型の川船で、溺れかけた兄弟の命を救うののちに二人の父親と判明する、同行の行商人ピエールである。
- (44) *Ibid.*, p. 165-166.
- (45) *Ibid.*, p. 163-164.
- (46) 十八世紀末から十九世紀初めにかけてはフランスの市の最盛期にあたり、ダニエル・ロッシュによれば、一七九二年にはフランス全土で四二六箇所の大都市、二四四六箇所の週市があったという。年のうち一週間開催され、遠来の客を集める大市は、どちらかという大都市と産業化の進行が緩やかな、人口密度の高くない地域に発達し、その逆に定期的に近隣の客を集める週市は、流通の活発な都市部で開かれ、生鮮食料品が多く取引される傾向があった。大市で有名だったのは、*カン*でも頻繁に名の挙がっているリヨン、カン、キブレー、ボーケールの諸都市である (Daniel Roche, *Humeurs vagabondes : De la circulation des hommes et de l'utilité des voyages*, Fayard, 2003, p. 207-214)。
- (47) Mme de Flesselles, *Les jeunes voyageurs en France*, éd. cit., t. 1, p. 27, p. 61, p. 67, p. 93-94, p. 163.
- (48) *Ibid.*, t. 1, p. 93-94.

フランスを旅する子どもたち (一)

フランスを旅する子どもたち (一)

- (49) *Ibid.*, t. 2, p. 103.
- (50) Laurence Fontaine, *op. cit.*, p. 188-189. 34-35 p. 202-203.
- (51) L.N.A.\*\*\* et C.T.\*\*\* (Tallard Constant), *Les jeunes voyageurs ou Lettres sur la France en prose et en vers*. Lelong, 1821, 6 vol. 7の数年後には、ドイッ出身の知識人で当時フランスについての多くの啓蒙書を出していたデッピンク (George Bernard Depping) が、タイヤールの文学色をそぎ落とし、ほぼ全面的に書き換えた版を出している (Cabanel, *op. cit.*, p. 98-99)。
- (52) *Ibid.*, Avant-propos, p. xxxiii-xxxvi.
- (53) Cabanel, *op. cit.*, p. 111.
- (54) モンテスキューの『ペルシア人の手紙』(Lettres persanes, 1721)、『プロス裁判長の『イタリア書簡』(Lettres familière sur l'Italie, 1800)などが挙げられる。書簡体は実際の手紙についてののみならず、語りの便宜的手段としても広く用いられた。
- (55) L.N.A.\*\*\* et C.T.\*\*\*, *op. cit.*, t. 1, p. 1-2.
- (56) スリゴール地方の名産品、ヤマウズラが十五世紀半ばにこの地方にもたらされた故事 (*Ibid.*, t. 4, p. 227-228)、『ソナム県アミアンで、かつて新婚夫婦の初夜権を聖職者が管理していた史実 (t. 1, p. 18-19)』、『アヴェロン県ロデー近郊の洞窟や旧火山の景観 (t. 5, p. 22-23)』。
- (57) この点については以下の拙論を参照。杉本圭子「旅行記というジャンル——スタンダール『ある旅行者の手記』をめぐって——」、『仏語仏文学研究』第一七号、一九九八年、五七—五九頁。
- (58) Charles Nodier, Justin Taylor, Alphonse de Caillieux, *Voyages pittoresques et romantiques dans l'ancienne France*, Firmin Didot, 1820-1878, 21 vol. 『古きフランス…』と称するだけあって、フランシユ・コンテ地方、シャンパーニュ地方、オーヴェルニュ地方など、分類には旧地方名が用いられている。邦語文献としては以下の論文を参照。石木隆治、「テロール男爵の『古のフランス、ピトレスク・ロマンティック紀行』」、『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ』第五七号、二〇〇六、六九—一〇一頁。文化財保護に尽力したテロール男爵(一七八九—一八七九)が中心となつて、数十年にわたつて続けられた大きな企画であるが、実際に出版された巻はイギリス人の観光旅行先として人気のあったノルマンディー地方、ブルターニュ地方、ピカルディー地方、自然豊かなフランシユ・コンテ地方、ピレネー地方、オーヴェルニュ地方、そしてブルゴーニュ地

方、シャンパーニュ地方など、国土の一部にとどまった。

(59) *France pittoresque*, Delloye, 1835, 3 vol. 定期購読の形で、ひとつの県につき一冊のペースで配本された。

(60) アンヌ＝マリ・ティエス著、斎藤かぐみ訳『国民アイデンティティの創造——一八〇〇—一九世紀のヨーロッパ』勁草書房、二〇一三、第一章注三〇。

(61) Girault de Saint-Fargeau (Société de gens de lettres, de géographes et d'artistes), *Guide pittoresque du voyageur en France*, Firmin Didot, 1834-1838, 6 vol.

(62) もともと「ひとくちに「キッド・ジョアンヌ」というても、出版年代やシリーズの種類によって、その内容や構成は大きく異なる。出版業者ルイ・アシエット (Louis Hachette) が最初に企画した「鉄道文庫」シリーズ (La Bibliothèque des Chemins de fer, 1853-1857) にはまだ記述的な傾向が強く、町の沿革や建造物 (それ以前のガイドブックに比べ)、遺跡、教会や城のほか、市役所や裁判所、橋などの公共建築物や個人の邸宅などへの言及が増えている)、自然の景観に加え、新たな傾向として、革命以降、各地で整備が進められてきた美術館・博物館の収蔵品や、散策や遠出のコースの提案が加わっていることが目を引く。いっぽう宿については乗合馬車の運賃や距離、レストランや本屋の情報と並んで、全般的な項目で触れられているにすぎず、正確な住所も示されていないことがある。そして、このシリーズの主要執筆者のひとつりのアドルフ・ジョアンヌ (Adolphe Joanne)、次いで息子のポール・ジョアンヌ (Paul Joanne) が指揮した「フランス全国旅行案内」(*Itinéraire générale de la France*) (一八六二—一九一四) というシリーズでは、前シリーズと内容、構成のうえで大きな変化はないものの、冒頭に旅行者への助言として、列車の料金体系や設備についての説明や服装についての注意が記されていたり、巻頭または巻末の索引にホテルやレストラン、郵便局、路面電車、馬車や船の発着所や運賃についての情報がまとめられていたり、本文の前後にホテルや鉄道、温泉の広告が何ページにもわたって掲載されていたりと、より読者の利便性に配慮したつくりになっている。キッド・ジョアンヌの歴史については以下の文献を参照。Hélène Morlier, *Les Guides-Joanne. Genèse des Guides-Bleus*, Les Sentiers de débats, 2007, 4-45; Daniel Nordman, « *Les Guides Joanne*. Ancêtres des *Guides Bleus* », in *Les Lieux de mémoire*, tome 1, « Quarto Gallimard », 1997, p. 1035-1072.

(63) Marie-Vic Ozouf-Marignier, « Le genre description géographique et ses équivalents en France dans la première moitié du XIX<sup>e</sup> siècle. Productions et finalités éditoriales » dans *Les Guides imprimés du XVI<sup>e</sup> au XX<sup>e</sup> siècle. Villes, paysages, Français* を旅する子どもたち (一)

フランスを旅する子どもたち (一)

- voyages, textes réunis et publiés par Gilles Chabaud, Evelyne Cohen, Natacha Coquery, Jérôme Penez, Bélin, 2000, p. 141-153. )の種の書物のタイトルには「*atlas* », « descriptions », « tableaux géographiques », « statistiques », « géographies »などの語が含まれる。
- (64) *Ibid.*, p.141-142.
- (65) フランス革命後に成立した共和国政府は、各都市の人口、土地利用、財政収支の状況などを体系的に把握する必要を感じ、各県の知事に情報の収集と報告を求めた。執政政府時代のナポレオンもこれを指揮したが、全国規模の情報収集が組織的に行われるようになったのは、七月王政下の「一八三三年に「フランス総統計局」(Statistique générale de la France, 略称 S.G.F.) が創設されて以降である。」の点について Hervé Le Bras, « La statistique générale de la France », in *Les Lieux de mémoire*, tome 1, « Quarto Gallimard », 1997, p. 1353-1082 を参照。
- (66) Jean-Bernard Richard (pseudonyme de Jean-Marie Vincent Audin), *Guide classique des voyageurs en France*, treizième édition, chez Audin, 1830-1831, « Des voyages en France », p. ii-iv.
- (67) Daniel Nordman, art. cit., p. 1042.
- (68) Madame de Tastu, *Voyage en France*, Tours, A.Mame, 1846.
- (69) *Ibid.*, « Introduction », p. 3.
- (70) たとえば第一章では、十八世紀のフランスの画家グルーズの絵を模写したことのある姉のアンリエットに呼びかけて、グルーズの生家がブルゴーニュ地方のトゥルニユ (Tournus) にあることを告げ (二七頁)、第二章では食通のギヨームに向けて、グルノーブル名産の果実酒ラファイアの話題に触れている (六一頁)。
- (71) Cabanel, *op.cit.*, p. 110. タストゥ夫人の本には最終章「パリ」を除き、ひとつの章につき二、三枚の挿絵(歴史上のエピソード、著名人の肖像、風景など)が入っている程度である。なお、この時代のもうひとつのベストセラーは、エルンスト・レヴィ＝アルヴァレス、ウジエヌス・マニユエル共著の『フランス、すべての学校のための一般読本』(Ernest Lévi-Alvarès et Eugène Manuel, *La France. Livre de lecture courante pour toutes les écoles*, Dezobry, Magdeleine et Cie, 1854-1857, 4 vol.)である。これはパリからやってきた男性教員が教室の中で、生徒ひとりひとりに呼びかけながら講義するこのスタイルで、イタリアの有名な児童文学「クオレ」(一八八六)のタイトルにちなんで「クオレ方式」と呼ばれる (Cabanel,

- op. cit.*, p. 112-114)。教員は季節の移り変わりや生徒たちの暮らしに合わせて、フランス各地の地理や歴史を教える。
- (72) 一八二三年の発掘作業により、南仏ニームの古代建築物メゾン・カレがさらに大きなモニュメントの一部であったことが判明したこと(一七二頁)、ピレネー地方のベルピニヤンの城塞の改良工事が一八二三年に行われたこと(一八五頁)など。
- (73) G. Bruno, *op. cit.*, p. 4, « Préface ».
- (74) *Ibid.*, p. 132-139.
- (75) *Ibid.*, p. 230-234.
- (76) Jacques et Mona Ozouf, *art. cit.*, p. 277.